OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前期サルトルの哲学研究――形而上学の問題を中心に
Author(s)	赤阪, 辰太郎
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73504
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　赤阪辰太郎　）	
論文題名	前期サルトルの哲学研究――形而上学の問題を中心に

論文内容の要旨

本論文の目的はフランスの作家・哲学者・知識人であるジャン=ポール・サルトルの前期哲学を「形而上学」という観点から読み解くことにあった。本論文は序章と補論、終章のほかに本論六章をもち、計九章で構成されている。

第一章では、作家の生と形而上学との結びつきについて、サルトルの議論の再構成を試みた。サルトルは1932年から1933年にかけて行われた講演以来、批評家の使命を作家の形而上学の析出に求めていた。本章ではまず、サルトルが断片的な仕方で言及していた読書経験の構造についての議論を、読書の現象学という視点から再構成した。その上で、批評行為がこの経験に基づきつつ、作家の用いる技術、作家の置かれた状況、作家が作品を通じて提示する形而上学の相関性を評価するものと捉えられていたことを明らかにした。40年代半ば以降、作家の形而上学は人間の条件への態度として定式化され直す。この点について、同時代の実存主義者との共通性を指摘した上で、メルロ=ポンティの議論を引き受けつつ、各人はみな固有の形而上学をもつというテーゼを引き出した。

第二章では、サルトルの従軍中における形而上学の発展を跡づけた。そこでは、サルトル本人のあり方（無としての実存）と相関する世界に対する態度（世界の所有）がともに無の形而上学を動機づけていたことを明らかにした。そこにハイデガーの時宜を得た受容が重なり、この思想は深化する。そこでサルトルが手にしたのは、現存在と形而上学の同一性というハイデガーの形而上学期にみられる思想を引き受け直した、生と哲学の一体性という発想であり、実在を前にした問いかけとしての形而上学という構想である。この思想が発展した形で『存在と無』に引き継がれる。

第三章では『存在と無』における形而上学について論じた。まず存在論の問いと形而上学の問いを区分した上で、各々が担うものを明確化した。存在論は、基本的に対自の構造および対自の即自への関係の全体性の解明を目指しており、そこにおいて論じられるのは、われわれが世界を分節化しつつ存在へと向き合うその仕方に他ならない。これに対して形而上学は、対自と即自の関係が結ばれる手前で、この領域区分そのものを導入する役割を担う。さらに存在論と形而上学はその可能性の現実的な条件として対自の出現たる絶対的出来事を基礎としてもつ点を指摘した。

第四章では、第三章で論じなかった他者論という視角から絶対的出来事が問題化される理路を辿った。この出来事とは、存在論と形而上学の可能性そのものを出現させるという意味でそれ自体が形而上学的な出来事である。それと同時に、この出来事は誕生という経験的な事実でもある。誕生の出来事は、他者が既に歴史化してきた世界への到来であると同時に、この到来によってひとつの時間地平が開かれるという意味で、歴史以前の出来事でもある。さらにこの出来事は間主観的な射程をもつ。『存在と無』の他者論はしばしば相剋の他者論であると理解されてきた。しかし、他者との原初的な関係が結ばれる出来事である対自の出現において、主体は他者と相互否定的に関与するものの、ここでの原初的な否定とは、対立する二項の関係を意味するのではない。そうではなく、絶対的出来事とは、そこから他者と対になることによって項そのものが出現してくるような、主体の生成の出来事である。

第五章と第六章では、戦後のサルトルが存在から所有へ、無の形而上学から形而上学なき倫理学へ関心を移していった、という一般的な理解に対し、戦後の文学論においても形而上学が息づいていることを示した。第五章では、メルロ=ポンティの文学論との比較を通じて、戦中のテクストにおいて形而上学的欲望と結びつけられる形で論じられていた存在欲求が、文学の動機として不可欠な要素として残り続けており、それが同時代的な読者との承認関係を通じて成就することが期待されていた、と論じた。第六章では、作家と読者の相互承認という理念が現実的には不可能であり、この不可能性の自覚自体が読者にもたらされることで価値として引き受けられ、倫理的な行為を促す、という意味で承認論の意義を明らかにした。承認の不可能性の体験を通じて、それを価値として担わせる、という構造は、無の形而上学が明るみに出した主体の構造を前提したものである。

以上を通じて、形而上学という主題が前期サルトルの実存哲学の根本に位置し続けてきたことを示した。そこで形而上学とは、われわれがそのなかで生き、そこから逃れることができない条件としての存在そのものへと向かいつつ、「なぜこうなのか」と問いかけ、それに対して独自な態度を取ることで答えを与える、という営みを意味する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　赤阪　辰太郎　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授 副査　教授 副査　教授	村上　靖彦 檜垣　立哉 澤田　直（立教大学）

論文審査の結果の要旨

赤阪辰太郎さんの博士学位請求論文『前期サルトルの哲学研究――形而上学の問題を中心に』は、前期サルトルにおいて、先行研究ではシステマティックには検討されたことがなかった「形而上学」という切り口から全体を見通した野心的な論文である。
「形而上学」という切り口を入れることによって、文学論と哲学的テキストを貫く仕方でサルトルの問題意識を描くことが可能になり、さらには先行研究には存在しない「形而上学」という新しい切り口でのサルトル像を極めて緻密な読解を通して取り出すことができたことが本論文の特徴である。とりわけ日本語翻訳が存在しない学生時代の論文や書簡といった資料を駆使し、初期の文学論をとおして主著『存在と無』の「形而上学」がどのように発生したのかという思想の発生論としてきわめて説得力がある。

本論文の構成は戦前期の文学論と想像力論、1943年に出版された主著『存在と無』、『文学とは何か』を中心とする戦後期の文学論という、3段階の時期にまたがってサルトルの形而上学の内実を明らかにしようとしている。
まず第1章では、読書経験における作品の受容・作品との一体化・作品からのへだたりという3段階の構造を論じたのちに、作家の経験の構造として状況・形而上学・技術の3段階を明らかにしている（論者は逆順で書いているが、発生構造からしてこの順序が適切だろう）。投げ入れられた状況、状況に対する態度の取り方としての形而上学、態度を現実化する作家の文体技術という3段階である。読者と作家双方の経験の構造を明らかにすることで、投げ入れられた状況に対してどのような態度をとり、どのように応答するのかという仕方で初期の形而上学を定式化している。
第2章では戦中期における日記や書簡を通して気分（情態性）の問題、世界を全体としてつかみ取ることとしての形而上学という視点が、ハイデガーの読解とともに提示される。
第2部に入り第3章では『存在と無』における形而上学が問題になる。問いは以下のように定式化される。

> ①第一の問いが、「***なぜ***存在が存在するのかpourquoi l’être est」（EN667）という形で表明される存在の起源についての問いであり、②第二の問いが「存在が**ある**のは***なぜか***pourquoi est-ce qu’*il y a* de l’être ?」（Ibid.）という形で表明される対自のとっての存在の起源についての問いである。③三番目が、***なぜ***対自が存在するのか、という対自の起源への問いである。（44頁）

このなかで自我が対自として発生するときに同時に自我の状況への巻き込まれ（事実性）と自我の世界に対する可能性とに分節され（48頁）、さらには世界全体を背景にしつつ自我がかかわる個物の分節というしかたで世界も分節される、という「絶対的出来事」の構造が取り出されていくことになる。

第4章では間主観性をめぐる『存在と無』の議論を有名な視線の相克の議論とは別の仕方で提示することに成功している。つまり対自の発生という絶対的な出来事を「可能にするのは他者の存在についての私の確信である」（64頁）という、形而上学との関係のなかでの他者であり、とりわけ身体論に依ることがない他者論という新しさを持つ。
補章では、3，4章を補完する形で「痛み」をめぐるサルトルの議論をたどる。痛みの経験は世界を介して現れるとともに、主体を個別化する（対自）。そののち、言語化を通して結晶化し他者とも共有されるのが「病」である（対他）。このようにして具体的な場面から『存在と無』の形而上学が跡付けられる。
第3部に入り、第5章では戦後の『文学とは何か』をメルロ＝ポンティの「間接的言語」と対比しつつ論じながら作家から読者への「呼びかけ」と読者による「承認」のモチーフを分析している。
第6章においては作家にとっての読者からの承認、そして読者にとっての作家の姿と現実の作家のずれ、という二つの方向からの理想と現実のずれというしかたで文学作品の産出が論じられる。このことから状況の変革への推力が導き出されることで、本論文は閉じられる。

本論文は、初期のサルトルの思想を従来の「アンガジュマン」の思想家というサルトル像とは全く異なる側面から描き出した労作である。フランス語における詳細な二次文献と対比させつつ論者は自らの主張を裏付けており、またハイデガーやメルロ＝ポンティといった同時代にサルトルが対峙した哲学者たちとの鮮やかな対比を描き出すことで立論を際立たせている。序文と結論において「風通しの良い存在論」として自らの描いたサルトル像を特徴づけているが、まさに本論は戦後流行した重苦しいサルトルの姿とはことなる軽やかに状況をサバイブしていく主体を描くことで、サルトル受容を刷新したといえる。

以上の点から、本論文は博士（人間科学）を授与するにふさわしい内容を持った論文であると判断した。